

## 河川・流域（5）（1-A-16-4～1-A-17-4）

本セッションでは、栄養塩類の他、大腸菌、農薬など幅広い対象について、河川からの流出特性に関する5題が発表された。

1-A-16-4では、自然河川における大腸菌の流出特性とSS濃度との関係を、山梨県内の渓流水におけるデータを基に解析された。講演の最初に河川からの流出がSS濃度に対応する微生物類とそうでないものがあることが紹介されたが、質疑の中で大腸菌は前者に分類されると考察された。

1-A-17-1では、融雪期における十和田湖の主要な河川と、十和田湖の水位を確保するために逆送される渓流水について、現地調査の結果に基づいて水質の変動とその特徴が解析された結果の報告があった。さらに、それらのデータから流入河川の水質が十和田湖に及ぼす影響の可能性についても言及された。

1-A-17-2では、奥多摩湖に流入する複数の河川において、規模の大きい降雨時の流量、栄養塩類の濃度変動が通日調査の結果に基づいて報告された。これらのデータなどから各河川の流域の特徴と水質との関連が考察され、奥多摩湖の水質に対する影響が言及された。

1-A-17-3では、淀川本流で行われた頻度の高い定時調査と出水調査から3年間の年間流出量が試算された。実測データに基づいて、3年間の流出量の変動と年降水量や人為的な放流の関連性が詳細に考察された。

1-A-17-4では、降水量から負荷量を推定する方法をベースとして、統計的手法を用いて例えば100年に1回の確率で発生すると考えられるSS負荷量の最大値を推定する方法が、白川流域を例にして提案された。

いずれの報告も実測データを基にさまざまな解析が行われており、説得力があるものであった。今後はこれらのデータを活かしながら、さまざまな物質の河川における動態をより汎用的に推定できる手法を確立することが望まれる。

（滋賀県立大学環境科学部 須戸 幹）